



兵庫県現代詩協会第28回総会で挨拶する神田さよ会長  
(於 神戸市中央区文化センター)

# 今年度に向けて

## ——コロナ禍を超えて

### 兵庫県現代詩協会 会報57号

2025年7月1日 発行.. 神田さよ

会長 神田さよ

2025年5月6日、第29回の総会は無事終わり、新理事も承認されて新しいスタートを切りました。新理事は、会員の皆様にとって有意義な事業の具体的計画を進めています。

今はもう過去のことになっていますが、2020年1月に新型コロナウイルスが日本で初めて確認され、これまでの日常が一変しました。人々は品物のマスクを買い求め、マスクなしでは外には出られない周囲の圧力さえ感じました。会合や集会は中止となり、人との接触は悪くさえあるような風潮でした。ウイルスが終息し、またウイルスの対処法も解明され、元の生活が戻りつつあります。しかし、行動を強制制限された意識はまだ名残を留めているように感じます。それを基点とした閉塞感、また他の要因からくる息苦しさは、社会全体に広がりを見せているように思われます。

兵庫県現代詩協会の集まりもコロナ対策なしに安心して人と直に会い、会話できることになりました。消費社会は物質的に豊かに見えた社会でしたが、本当の豊かさは、会話をして人とつながっていくことだと思えます。閉塞感のある社会だからこそ、人とのつながりが必要なのではないでしょうか。

協会のイベント、集まりで、直接対面で詩について大いに語り合っただけだと思えます。そうすることで、緩やかな繋がりが出来てくるのではないかと思います。孤独なときに詩が生まれるのを、私たちはいつも経験していますが、「孤立」は私は望ましくないと考えます。谷川俊太郎さんの代表作の一節に「万有引力とは／ひき合う孤独の力である」とあります。

時里前会長と同様に、この役割を全うできるかわかりませんが、微力ながら力を尽くしてゆきたいと思っております。会員の皆様どうぞよろしくお願いたします。

#### 兵庫県現代詩協会第29回定期総会報告

事務局長 野口幸雄

2024年度総会が5月6日(日・祝) センタープラザ西館6階17号室で開催された。時里二郎会長の開会挨拶の後、議長に季村年敏夫会員が選ばれ、出席者46名、委任状47名で総会が成立していることが報告された。議事進行は次の通り。

- 1、入退会者報告 事務局長 野口幸雄  
12名が入会 会員130名となる
- 2、2024年度活動報告 野口幸雄
- 3、2024年度活動報告 会計担当 玉川侑香
- 4、2024年度決算監査報告 監事 森田美千代
- 5、2025年度活動計画案 野口幸雄
- 6、2025年度予算案 玉川侑香
- 7、新役員選出 野口幸雄
- 8、今年度の活動計画
- ① 総会
- ② 名簿作成
- ③ アンソロジー参加者の集い

- ④ 会報発行
- ⑤ 詩の集い（読書会、詩の講座等、詩の行事を企画）
- ⑥ 詩のフェスタひょうご2025
- ⑦ 文学紀行
- ⑧ ホームページの運営
- ⑨ 30周年記念事業企画
- ⑩ 理事会（常任理事会、詩のフェスタひょうご実行委員会を含む）

全ての議案に対して、賛成多数で承認された。

休憩後、第2部に移り、新会長神田さよ氏による挨拶及び新役員の紹介。そして時里二郎氏による「詩を書く」ということ」について講演があった。

次に新入会員の一色真理、海埜今日子、しもやまゆりこ、竹内よし栄、為平澤氏の紹介、朗読が行われた。閉会の挨拶を丸田礼子新副会長が行い、総会は終了した。

### ■総会第2部 時里二郎さん講演

#### 「詩を書くということ」

文 丸田礼子

「この演題で何度か話をしてきたが、今回は起源を少し遡って、言葉の生まれる前、言葉の根源にあるものを、韓国の作家ハン・ガンさんの作品に絡めて、ぜひしなければならぬと思った」と話し始める時里さんの講演を、出席者は背筋を伸ばして聞き入った。

一七年前、霊長類の学者山極寿一氏の『暴力はどこからきたか人間性の起源を探る』を読み、感銘を受けた。ひとの進化の過程で、争いを避け、克服するにはどうしたらいいのか。長い年月をかけて平和を求めてやってきたのになぜひとは大きな暴力、戦争をするものに至ったのか。○争いの原因は性と食べ物にあり、これらをコントロールするのは、近親婚の禁止（家族の絆）と食べ物の分かち合い（家族の結束）だった。類人猿は獲物を所有し、分け与え、その場で食べる。人類は獲物を徹底的に分かち合い、その場で食べない。持ち帰る移動の時間、家族の喜びを想像する（想像力の発生）これによって家族の絆や結束が



講演する 時里二郎氏

できる。○サルや類人猿の赤ん坊は泣かない。ひとの赤ん坊は母親だけでなく、家族や集団全体で育てる。子守歌の発生内面的な心情（抒情）赤ん坊を泣かせないようにする子守歌はことばがないから声で変化をつける。○二足歩行がもたらした身体的な変容。脳の発達と共に声帯が変化し、繊細な声や大きな声等、表現が豊かになった。手足も自由になり舞踏やリズムや歌が生まれ、共同体の連帯感が無限の力を出せると思い、敵と戦う気持ちがあるにもふくれあがり、異常な力で敵に向かうようになった。ひとが言葉を持ったとき、言葉のなかに埋められた二つのもの（抒情や身体的な力）が引き継がれたのではないか。

続いて、世界は酷薄でありつつ、なぜかくも美しくあるのかと問う韓国の作家ハン・ガンの作品を取り上げた。――

小説に暴力性を正面から取り上げている。家族をつくる、食べ物を分かち合うことが暴力性を克服できることにつながるのか。初期作品のなかで食事の描写がひんぱんに出てくる。食べることで、共同で分かち合うこと、拒食症、過食症その人たちが食べるにより快復する場面、一緒に食べることを奪われた人。山極寿一さんの著作を思い出す。なぜハン・ガンの作品に引かれるのか。食べさせなかった、一緒に食べたかった、人間の根源的な思いが彼女の小説によく出てくる。『別れをつげない』は激しい小説で、言葉が人間性を獲得する以前の激しい身体性を受け継いでいる。資料の詩「全ての白いものたちへ」の底に流れているのは、精神的な子守歌的なものがある。――

ここから「詩について」のあれこれが語られた。

○喃語（意味のない声）を発音する幼児は母語をどうやって獲得するのか。喃語でやすやすと何でも発音できた幼児は、喃語の極みにおいて全て失わなければ一つの言語を獲得し、その言語の共同体に入ることではできない。自由に発音できた痕跡は残っていない、失われた言葉はなくなっている。忘れられただけだ。忘れられた痕跡が獲得した言語のなかにこだまとして残っているのではないか。我々の書いている詩のなかに痕跡があるのではないか。初めて聞く言語でもどこか響くものがある。ポーランド語の詩を聞いて意味は分からなくても感動した。忘れても思いは絶対消えない。詩を書いた思いはのこる。書いたことは忘れられてもまた甦る。○詩は思い出すように書く。私の思い出ではない。私の記憶を思い出すのではない。誰かの記憶が私の記憶に紛れ込んでいる。私の記憶の波打ち際に到着したのだから「私」の記憶には違いない。詩は忘れられた多くの「私」の記憶。私はそうした忘れられた多くの私の記憶の流れ着く場所である。誰かの忘れてはならないものを私を通して現れてくる。○我々が詩をかくとき意味を考える。意味を伝えることは本位ではなく、言葉がやってくる。言葉を信じたい。書かれた詩はみんなに読まれたがっている。朗読は言葉を分かち合う喜びとして、もっと考えてもいいのではないか。等々――

ひとが獲得した言葉そのものに沁みついてきた抒情と激しい身体性についての考察は目から鱗が落ちる思いだった。食べさせてもらうということほど心を動かすも

のではないと改めて認識した。日常のなかで、ぼんやりと考えていたことに様々な新しい視点を与えられ、言葉とは何か、詩とは何かを深く考えさせられた講演で、講師に深く感謝したい。時里さん、ありがとうございます。

## ■読書会「蜂飼耳の詩について」

文 とし総子

十二月七日に行われた蜂飼耳さんの読書会。参加者は、四十名弱ほど。あまりの盛況ぶりに驚きながらの読書会のはじまりでした。チューターは、たかとう匡子さん。朗らかに、けれど真剣な眼差しを持って「蜂飼耳さんの詩と言うものは、決して難しい言葉を使わないのにも関わらず、組み合わせるものによって、まるで考え付きもしなかった詩の世界を描き出すところにあります」という言葉からはじまりました。

蜂飼耳さんの書かれているものは「現代詩」であり、それは戦争の抑圧や言葉への統制から解放された、大きく変わっていった詩に多大な影響を受けていたのではないかと。蜂飼さんが三五歳の頃に発表された『いまにもうるおつていく陣地』という詩を引き合いに出され、「この詩の中には“陣地”という言葉が出てきます。この時蜂飼さんはそれを戦争用語としては捉えています。戦前の言葉の意味から離れ、思想などの強い衝動ではなく言葉を整えることによって、“意味では書いていない”“イメージによって読者に詩を感じてもらおう”という詩作をしています」と語られていました。

もう一編引き合いに出された「あさがお」という詩では、主人公は朝顔が咲いているのを見て散歩へ出掛けます。その間に事が起き、散歩は中断されます。ここから詩は入れ子式になり、主人公以外の視点が挟まれます。最後再び主人公の視点に戻り家へ帰り着きます。主人公は全ての真相を知ることではなく、そしてその真相を読者も全ては教えてもらえないのです。蜂飼さんは、読者に真実も任せる書き方を、つよく意識して書いていられるようになっています。

蜂飼さんの詩作の中には小説も書いたということが、大きな要素として出てきます。「いったい散文と詩の間には何があり、何が無いのかを深く意識して探求していたのではないか」とたかとうさんはおっしゃっていました。またそれは、小説を書くことによって、より深くは蜂飼さんが

詩へと向かい合うための経験だったのではないかと。資料の中で「詩は説明ではない。単なる行分け散文の鈍さからは離れたところにしか詩は成り立たない」と蜂飼さんは語っていました。

最後に、たかとうさんが取り上げられた詩、九年前の詩集より「顔をあらう水がほしい」の解釈を披露してくださいました。最初の二文

「檻のなかにいるものがなぜそんな楽になっているのかわからない」

これをたかとうさんは、墮落していく動物たちの姿ととられました。そしてこの先の「檻のなかにいるものがなぜそんな楽になっているのか」

ここには「分からない」が入っていないことについて、墮落を抜け出し、新たな自分だけではない幸せのために「顔をあらう水がほしい」のではないかと。墮落した動物だけでなく、自分たちが不干渉に目を閉じている水問題なども絡んでいるのではないかと。とご本人や、その背景、それまでの詩の歴史をしっかりとらっしゃるからの読み解きをさしていただきました。

この読書会に参加された方は、蜂飼耳さんの講演会をきくと深く聞くことができるのではないかと感じる、読書会でした。

## ■第14回 ポエム&アートコレクション展

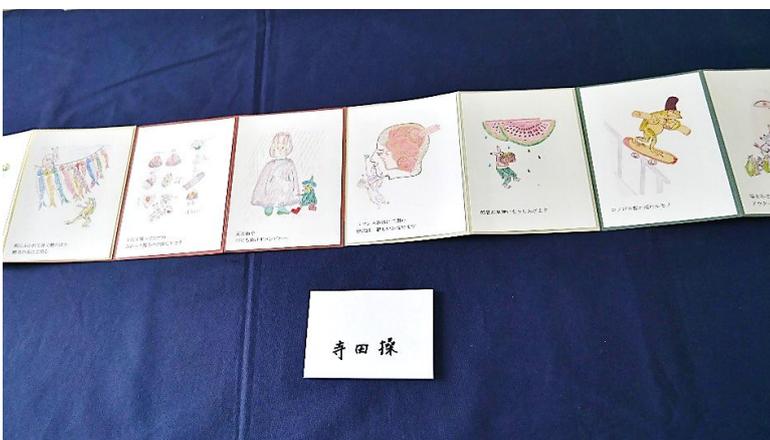
文 福田知子

今春、3月27日(木)から4月1日(火)に開催されたポエム&アートコレクション展。今年で14回目にあたるこの展覧会には、84名もの多くの来館者に来ていただけで無事に終了できた。なかでも3月29日(土)の講演会にはそれらに加え40名の方々が来館され、総勢124名もの方々が来てくださった。

兵庫県現代詩協会会員によるポエム&アートコレクション展出品者は、チラシ掲載の当初予定の21名よりも2名少ない19名(飯島小百合、大西隆志、河原真紀、後藤益男、下山百合子、高木敏克、高橋須美子、竹内よし栄、谷村ちぐさ、玉川侑香、寺田操、とし総子、永井ますみ、永峯留美子、中堂けいこ、野元正、福永祥子、松浦三津子、山本真弓・敬称略)であった。ともあれ、今年も20名近い会員の方による詩とアート作品の展示ができたこ

とは、神戸文学館にとっても歓迎できる内容であったようだ。

また会期中の講演会では、「詩の魅力とは、何だろう」というタイトルで、神尾和寿氏に話していただいた。主旨は「詩の魅力とは、何だろう?—詩を書くようになったからといって、この問いに対する正答が得られたわけではありません。それどころか、むしろ、難問であるということがますますはつきりしてきました。あるいは、問いが深まってきたと言えるのかもしれませんが。この機会に、あらためて問いかけてみます」であった。そして当日は、多くの詩を掲載した分厚い資料をみんなに配布され、一つ一つにねいに解説しながら話された。観客の中には詩を書いていない人もおられたようだが、みんな聞きながら、神尾氏の親しみやすい口調での話に熱心に耳を傾けておられた。



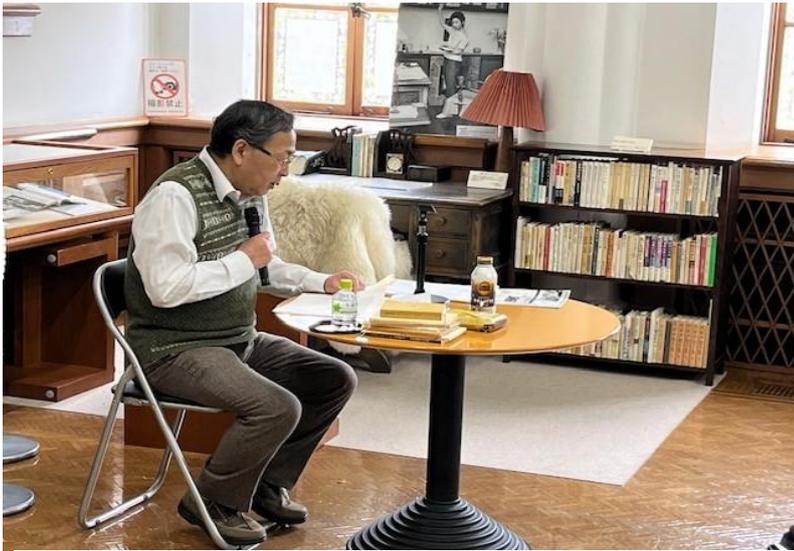
ポエム&アートコレクション展から展示作品

ポエム&アートコレクション展は今回で一旦停止することが理事会での話に上った。しかしながら詩を介しての神戸文学館との連携は停止したくない思いだ。

## ■神尾和寿氏の講演会に参加して

文・福永洋子

神戸文学館で「ポエム&アートコレクション」(3月27日~4月1日)で開催中の29日(土)同文学館と兵庫県現代詩協会との共催で、講師に神尾和寿氏をお迎えして「詩の魅力とは、何だろうか?」の講演会が開催された。ほぼ満席の聴講生、まずは館長さんの御挨拶、続いて福田知子さんの優しい笑顔溢れる司会で参加者全員が心を一つに集中して、いよいよ本日の講師「神尾和寿」氏にマイクはバトンタッチ。演題は「詩の魅力とは、何だろうか?」



神戸文学館で講演する神尾和寿氏

十数枚に及ぶテキストを一人一人に配布なさって、神尾さんはその中の詩を一篇、一篇をゆつくり朗読しながら、身近な視点から感想も述べられ、お話しを進めて下さった。

最初の作品は「反省会」(みづきみつ)全体会話体のような作品で、聞いていても殊更詩的表現などという箇所はなく平明な作品だなあと思ったが、神尾氏のコメント(それぞれの作品の後ろに収録)と評を聴きながら自分が随分詩に対して「不遜」であったなあと俄かに気付かされた。コメントにはこう書いてある「あまりにも自然すぎる書きっぷり(しかも、それが見事に作品として結晶する)に度肝を抜かれました!」。

作者と同じ目線で、いいえまるで作者に寄り添うようにして作品を取りあげていらつしやる。テキストには六篇の作品を取りあげられていたが、どのコメントからも神尾さん自身が作者よりそれぞれの作品に愛情(?)を持たれたのではないかしらと思ってしまう。そして私が一番心に染みしたのは詩作品「シスターメアリー」に寄せる神尾さんのコメント。

「無心にそして丁寧に書いていくと、技術を突き破ったものが出現してくるのではないのでしょうか。その言いようのない何かには読者は驚かされますが、

先ず、書いている本人がそれに感心しているような気がします。」と。

「詩の魅力とは、何だろうか」を聴講して感じたことは前述の「技術を突き破った」の言葉から感じ取れる神尾さんの「詩を書く人」それに「詩を読む人」に対する深い想いなのではないだろうか。

総じてとても丁寧なお話しぶり、終わりまで私語もささやかず一心に聴くことができたが、会場に流れていたのは何か「ホッとする」温かい空気感でもあった。「詩の魅力とは、何だろうか?」今回の講演で参加者全員、身近にあって、つい見過ごしていた、とても大切な答えをそれぞれが見つけたのではないのでしょうか。

## ■文学紀行

### 晩秋の淡路島一周文学史跡巡り

日帰りバスツアー

文 福田知子

2024年12月14日(土)、暮れも押し迫る中、兵庫県現代詩協会・関西詩人協会交流会としての合同企画で日帰りバスツアーがあった。集合時間に遅れないように早めに待ち合わせ場所である三ノ宮駅南東、市役所南の東遊園地北に集合したが、大阪チームはなかなか到着しない。比較的寒さの和らぐ日であったが、初めての企画でもあったので、ちゃんと到着できるか不安でもあった。

とはいえ、親しい顔ぶれをみて、あれこれ雑談しているうちに、関西詩人協会のメンバーを乗せたバスが30分以上遅れて到着した。どうも高速道路で朝の渋滞に巻き込まれたようだった。ともかくこのバスが来ないことには私たちは文字通り路頭に迷ったままになるから、ホッとバスに乗り込んだ。

中型バスが満席になるほどいっぱいになった。久しぶりの遠足のように、みんなの表情は明るかった。

まずバス乗務員の方の挨拶の後、今日の講師の方が挨拶に立たれた。武庫川女子大学日本語日本文学科教授の影山尚之氏である。「萬葉集の表現空間」や『歌のおこない 萬葉集と古代の韻文』等々、万葉の歴史・文化のスペシャリストでありながら、気取ったところのない、温かい雰囲気であげられていたが、どのコメントからも神尾さん自身が作者よりそれぞれの作品に愛情(?)を持たれたのではないかしらと思ってしまう。そして私が一番心に染みしたのは詩作品「シスターメアリー」に寄せる神尾さんのコメント。

「無心にそして丁寧に書いていくと、技術を突き破ったものが出現してくるのではないのでしょうか。その言いようのない何かには読者は驚かされますが、先ず、書いている本人がそれに感心しているような気がします。」と。

「詩の魅力とは、何だろうか」を聴講して感じたことは前述の「技術を突き破った」の言葉から感じ取れる神尾さんの「詩を書く人」それに「詩を読む人」に対する深い想いなのではないだろうか。

総じてとても丁寧なお話しぶり、終わりまで私語もささやかず一心に聴くことができたが、会場に流れていたのは何か「ホッとする」温かい空気感でもあった。「詩の魅力とは、何だろうか?」今回の講演で参加者全員、身近にあって、つい見過ごしていた、とても大切な答えをそれぞれが見つけたのではないのでしょうか。

さて、ここで当日の行程を挙げておこう。

向かうところは淡路島。まず明石海峡大橋を通り、淡路(〇)へ。

そこから①石屋神社―②絵島周辺散策―③伊弉諾神宮―「寿司一」で昼食。

その後、津名一宮 IC (縦貫道) 〓西淡三原 IC ④おのころ島神社―⑤淳仁天皇陵―⑥慶野松原へと。



松林と広がる砂丘 慶野松原にて

帰りは、西淡三原 IC〔縦貫道〕⇨淡路 SA 立ち寄り⇨〔淡路縦貫/阪神〕にて、三宮到着後、新大阪へ。  
最初に到着した石屋（いわや）神社は、鳥居を通し、真つ青な海が見通せる。ご祭神は國常立尊、伊弉諾尊・伊弉冉尊。春分・秋分の日には、社殿で（鳥居の中央から昇る日の出）を見ることが出来るそうだ。また淡路に3つしかない、干支をあしらった方位磁石もあった。神社の左手から降りて、絵島周辺を散策する。途中の海に突き出た奇岩の島を驚嘆の想いでみつめ、ふと柿本人麻呂の石碑に目を止める。「天離る 夷の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ」（柿本人麻呂『万葉集』）。

そこから歩いて伊弉諾神社に立ち寄り、その後、昼食の「寿司一」へ。お寿司が用意され、お酒の注文にがうごぎ、思わず地元のお酒を一合たのでしまった（笑）  
さて、午後は淡路島の南の「おのころ島神社」へ。道路沿いに建つこの超デッカイ真つ赤な鳥居に驚きながら、

社殿に向かう。ここは「伊弉諾命」「伊弉冉命」の二神により創られた日本発祥、国生みの聖地である。もちろん縁結びで有名。ここのおのころ島神社の正殿は、伊勢神宮などと同じ神明造。屋根の両端について千木（ちぎ）は、内削ぎ（先端が地面に対して水平）になっていて、千木の間にある鯉木（かつおぎ）の本数が8本になっている。社殿は思ったより小さいこともあって、みんなぐるりと一周していた。

最後に「淳仁天皇陵」へ。田園風景の中にある、こんもりと小さな山形の陵。ここは宮内庁が指定する兵庫県唯一の天皇陵であり、それがなんとここ淡路島にある。淳仁天皇は、第40代天皇・天武天皇の孫。皇位をめぐる争いに巻き込まれ、わずか6年の在位ののち淡路島に島流しされ、この地で生涯を終えたそうだ。淡路の旅もいよいよ最終地である慶野松原へ。松林と広がる砂浜に広がる青い海——心解き放つような気持ちよさだ。ここで全員の写真を撮り、各々バスにもどった。

ふたたび明石海峡大橋を渡り、帰路へ。バスが三宮に着くまで話し声が絶えない楽しいバス旅だった。

### ■ひょうご詩の講座2025の報告

文 高木敏克

事務局長の野口さんより野口さんの作られた『ひょうご詩の講座』の講師依頼の案内文は会合において配布したが、会合に来られなかった会員にも郵送で講師依頼をすることとなった旨の連絡が八月一日にありました。その理由としては、会員全員に講師依頼をしないとどこから不平不満が出るかもしれないので一応全員に講師依頼をしなければならぬということでした。それでも講師の申し込みがない場合には高木の考えている方々に依頼して下さいという結論でした。

同時に『ひょうご詩の講座』への一般参加者を募るために神戸新聞社・朝日新聞社・毎日新聞社の文化部記者にメールに併せて電話連絡し面談も申し込んだが、今回は兵庫県知事選挙に文化部記者まで動員されることになったので、昨年度のような取材は無理であるので参加者募集の案内文をメールに添付して記者席に送ることにしました。しかも、この時点で講座の講師の名前を案内文に載せられなかったのは致命的な失敗でした。このような講

座においては講師の詩人の名前が肝心でそれを見て参加不参加を決められるのが参加者の自由心理だと思われます。そのためには講師は早めを選んでお願ひするのが原則だと思ひます。全員参加型の講師団は外部に向けた講座は魅力に欠けると思ひます。このことは各新聞社の反応にまづ現れたと思ひます。最終的に講師にお願ひできた方々は講師依頼に應じていただいた次の方々でした。

十二月二十二日に福田知子、一月五日に梅村光明、二月九日に荒川稔、三月九日に馬場秀司の各氏でした。問題の参加者の人数ですが、極めて少なくして講師の方々には申し訳ありませんでした。また、講義を主体にされた方には少人数の問題は少ないのですが合評会を主体にされた方には多少問題でした。

今後の課題としては、その後の常任理事会でも話し合われた通り、講師の選任については今回の様に会員全員に願ひすると混乱するので、次回からは常任理事会で選任することに決まりました。

また、講座の質を上げるためにも単に会員拡大のための新会員勧誘講座にとどまらず、既存会員も含めて参加できる充実した総合講座にし、常任理事の神尾和寿、福田知子、高木敏克がポエム&アートも含めて企画し、野口幸雄事務局長とともに運営することになりました。

【予告】第28回読書会  
2025年7月27日(日)  
13時～  
神戸市中央区文化センター  
1002号  
「高橋順子さんの詩について」  
(仮題)

チューター 江口節氏

会報に同封の応募はがきは7月20日(日曜日)までにご投函ください。

【予告】2025年ふれあい文化の祭典  
「詩のフェスタひょうご2025」

10月5日(日) 13時30分~16時30分(受付13時から)

ラッセホール 5階「サンフラワー」

〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-10-8

TEL 078-291-1117

主催 ふれあい文化の祭典詩のフェスタひょうご実行委員会

兵庫県・(公財)兵庫県芸術文化協会。兵庫県現代詩協会

講演会 演題「調整中」

講師 高橋順子氏(詩人)

主な著作『幸福な葉っぱ』(花椿賞受賞)、『時の雨』(読売文学賞受賞)

『貧乏な椅子』(丸山豊賞受賞) その他著書多数

9月24日(水) までに葉書で申込んでください

申込先〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町4-4-5-902 野口幸雄宛

(住所・氏名/ふりがな/電話番号明記のこと)

■会員の詩集から

文 時里 二郎

◎水田賢一『南京虫』(二〇二四年六月濔標)。第一詩集。二部構成になっていて、前半は母のことを書いた三〇編を収める。第一詩集だが、すでに魅力的な語りの詩のスタイルをしっかりともっていて、何よりも読ませるのだ。よみない語りのリズム、構成の仕掛けの妙、方言を取り込んだ言葉も、人物の息遣いが伝わってきて、まるで映画の一場面を見せられているような気分になる。例えば、「くるまれて」という四編の掌編でできている作品は、それぞれ母の来歴を象徴する場面を描いているのだが、どれも母の濃密な人間性をぎゅっと詰め込んだシーンが眼前に

浮き出してくる。また表題作である「南京虫」も三作からなる本詩集のクライマックスとでも言うべき作品だが、まるで三編のオムニバス映画を見るような臨場感を味わうことができる。詩集の前半のテーマははっきりしていて、母の記憶を残したい、子供や孫達にも伝えたいという思いに貫かれているのだが、実は、それは同時に、作者自身の肖像にもなっていることに気づく。さらにこの詩集の魅力はほかにも、昭和という時代や、長田の靴工場を初め、その頃の神戸の市井の生活や風俗も生き生きと描かれているところにもあることを付け加えておきたい。

◎とし総子『あなたの肌を描く』(二四年十月濔標)。第一詩集。「あなたの肌を描く/その声が/私の頬に どう響いたのか/光の反射だけを使って/うつくしい色をとく/空気に置いた透明/覚めた筆先で熱を通す/あなたの青をあなたの光へ/あなたの紫を/伏せていく夕陽へ流した(以下略)。表題作の三連目までを引いた。それぞれの連をひとつのある意味のかたまりとしてとらえることはむずかしい。通常の詩は、意味を結ばなくても、言葉の連鎖でイメージを重ねていくところに面白さが出てくるものだが、それもどこか拒否しているところがある。なかなかむずかしい詩の試みだ。ほかの作品も読んでいくと、作者の言葉は、実に繊細に、意味の抽象性に耳を傾けているように見える。意味が確かな像を結ばないようにはぐらかしたり、どこにも焦点が集まらないようにずらしたりそらしたりして、意味性のフラットな言葉の生地を紡ごうとしているように思える。絵画や映像、あるいは音楽では、それはよくある表現手法だが、言葉ではあまり見られない。「手を取り戻して叫ぶ嵐/ひとの子供が笑う歯の奥/見えないところで赤い点を灯して/あなたは言う通り/泡のひとつも育てずに/雲はわかれをふりかざす(略)」「実った末は」部分。「あなた」が出てきたり、何かのシーンの描写のように見えて、各行は乱反射して意味の收拾が付かないように行が置かれている。ふと、インスタレーションなどのように映像や音楽とコラボレーションしていくともっと生きる言葉だという印象をもった。今までにない独特な表現性をうちだした詩集だと感じた。

◎竹之内総『さよなら 家康』(私家版二四年十一月)。二一年の『ことわり付喪神』につぐ第二詩集。(竹内総は荒

川総さんのペンネーム)。前詩集が強い印象に残っているのは、コロナやSNSなど、この社会の世相を腑分けいく、徹底した世相批判と寓話的な手法の鮮やかさのためだった。今回の詩集もその詩のスタイルは変わらない。いや、さらに技法的な磨きがかかり、詩の世界に情感のじみじみが混じるようになってきた。ことに、言葉の表記や、音(発音)の表現へのこだわり。「tono」 という作品は、「朝 五時/聴こえない 音がする/ことつ ことり」。朝刊が郵便受けに落ちる音だが、もう途絶えたその音を巡って、「ことつ」が「tono」になり、「ことつ tono」の 囀りのように「に」変容し、さいごは「ああ 透明な配達員が/生真面目に配る/tono/ろ しき 早朝」となる。ほかにも「停車する な前」も、たんなる風刺や寓話の趣向を越えて、ヒトという存在の根の部分に触れた味わい深い作品だ。もう一つ、作者の父の死を題材にした「点(ドット)」や「阪神ちゃん」と呼ばないよ」も、ひとつの時代の終焉をからめて、父を懐かしむ作品になっている。この詩集で繰り広げられる日本社会の戯画や寓意や世相批判ににじんでいる深い諦念と憂愁とは、作者のかぎりない、ヒト社会や世相への愛着と執着の裏返しなのである。

◎以倉紘平全詩集(二四年十二月編集工房ノア)。七〇〇頁に及ぶ函入りのりっぱな一巻の上梓を言祝ぎたい。これまでにも以倉さんの詩集については本欄で何度か書かせてもらった。『駅に着くとサーラの木があった』というアンソロジーについて次のように書いている。「以倉さんの詩の見えないテーマは「時間」だと、かねがね感じていた。その詩の魔術は、人生のとある一時を、永遠の時間の層に映し込む技法にある。それは《ノスタルジアの詩学》とでも呼ぶべきもので、喪失のかなしみを記憶の沃野に溶かし込む心のいとみなみと言えはいいだろうか。思い出すことはすべて失われて還ってこない。ただ、そのかなしみはいつまでも時間の海をたゆたい、詩はそれを言葉で掬い取って、かけがえない時間の結晶として差し出されている。」全詩集では、第一詩集『二月のテーブル』(一九八〇年)と次の福田正夫賞受賞作『日の門』(八六年)を初めて読むことができた。前者は以倉さんの抒情詩がすでに胚胎されていて興味深かった。しかし以倉さんの本領は後者に収録された『平家物語』に題材をとった散文スタイルで書かれた一連の作品によってゆるぎないもの

になったという印象だ。それから長く勤めてこられた定時制高校の教員としての経験も以倉さんの詩の重要な土台になっていることは言うまでもない。こんど全詩集を読み返して、『遠い螢』（二〇一八年）の、愛娘を病で亡くされたことをモチーフにした痛切な諸編が、やはり忘れ難かった。「娘と病院で暮らした二百七十日で／ぼくの人生はあらかた終わってしまった／これは戦争だと思って戦ったが／助けることができなかった／ぼくはこの上なく不甲斐ないみじめな父親であった／もう死んでしまってもよいわけだが／娘の生きる場所は／生きているもの／このころの中にしかないと思うので／せめて生き続けて／思い出してやりたいのである。」（「ふりだしにもどって」部分）。巻末に詳細な年譜が付してあり、以倉さんの詩の土壌にも触れることができた。

◎玉川侑香「音が するのだった」（二五年三月詩人会議出版）。玉川さんはこれまでに、『戦争を食らう 軍属・深見三郎戦中記』で、軍属としてインドネシアに渡った父の手記をもとに「詩物語」として戦中を描き、『平野のまちの物語』で、戦後の神戸の下町の人間味溢れる高度経済成長期の日常を描写してきた。そして本詩集は、戦前の神戸が、作者の父母の出会いや「恋愛時代」とともに描かれている。詩集のモチーフは「彼らが生きる舞台となった日本の国はどのように戦争へと突き進んでいったのか」ということに尽きるのだが、本編に入る前にある序詩「音がするのだった」の「音」とは、日本が「地響きをたててくずれていく」予兆の音だった。だから、本編は逆に、戦争が始まる予兆としての「音」に耳をかたむけようというのである。外国人との交流も日常生活に溶け込んでいた神戸。仕事も娯楽も「外人」なしでは立ちゆかない下町の暮らしに、戦争の見えない（聞こえない）「音」がたちどころに神戸の街の、日常の平穏を脅かしていく。軍服男が教壇にたち、軍事教練がはじまり、外国の商館が閉鎖され、特高が生活の中に踏み込んでくる。しかし、今から考えれば、異常な変化であり、明らかに不条理な社会の状況であることをなのに、当時の社会は、それを受け入れるよりすべをしらなかつた。この詩集には昭和一三年の「阪神大水害」も出てくるのだが、それは当然、「阪神淡路大震災」が重ねられている。その時、はっと気づかされるのである。そこには今の社会が重ねられているのではないか。戦前と

同じような事態になりかねない「戦争の影」が、私たちの生活や社会のなかに兆していないだろうか、戦争の「音」がしていないかというのである。ロシアによるウクライナ侵攻や、イスラエルとパレスチナの戦禍、台湾を巡る不穏な情勢が、日本社会を身構えさせてはいないか。玉川さんは、これで前二作に本作を加え、戦前・戦中・戦後の神戸三部作を完成させた。詩作品としてのみならず、昭和の神戸の庶民の生活史として、あるいは戦争の記録としても、その意義は大きい。

### ■理事会・常任理事会の報告

#### 【第3回常任理事会】

11月9日（土） センタープラザ西館会議室

出席者 11名 欠席者 1名 \*入退 入会2名 退会 1名

#### \*会計報告

#### \*会報

\*読書会 12月7日 神戸市中央区文化センター 蜂飼耳の詩について（チューターたかとう匡子顧問） 参加申し込み者数 現在 30名

\*「ひょうご詩の講座」 12月8日 神戸市中央区文化センター 講師 12月福田知子 以後、1月梅村光明 2月荒川稔、3月馬場秀司

「宝塚詩の会」 11月17日 山之口貌について。

\*文学紀行 12月14日 淡路島一周文学史跡巡り 参加申し込み数 現在 17名

\*「ひょうご現代詩集2024」出版社を遊文舎に変更 参加者数 94名

\*役員選挙 選挙管理委員 野口幸雄、神田さよ、岩井八重美 開票日 1月24日 投票用紙、被選挙人名簿、返信用封筒を 12月会報に同封。

\*ポエム&アートコレクション 2025年3月25日より4月1日・特別講演 3月29日（土）講師 神尾和寿会員\*日本現代詩人会セミナー in 神戸 3月15日 ラッセホール

#### 【第4回常任理事会】

2月2日（日）神戸市中央区文化センター

出席者 11名 欠席者 1名\*退会者 1名

\*会計報告\*会報 12月1日付発行済 \*読書会 12月7日蜂飼耳の詩について（チューターたかとう匡子顧問）参加者 39名

\*「ひょうご詩の講座」 12月8日 講師 福田知子 受講者 4名・1月2日 講師 梅村光明 受講者 10名 担当係から、案内を新聞社などに通知。今後の方法を検討。

\*文学紀行 晩秋の淡路島一周文学史跡巡り 12月14日（土）参加者 41名（内兵庫 23名） 会計報告

\*「ひょうご現代詩集2024」進捗状況報告

\*ポエム&アートコレクション 3月27日（木）〜4月1日神戸文学館 出品者 21名 チラシは遊文舎から「ひょうご現代詩集2024」と同封して郵送。講演会3月29日（土）講師 神尾和寿会員

\*日本現代詩人会セミナー 2025 in 神戸 3月15日（日）ラッセホール 申し込み数約 50名 懇親会後の2次会について

\*役員選挙開票結果報告 開票 1月24日 神戸市中央区文化センター・選挙管理委員 岩井八重美 野口幸雄 神田さよ 選挙結果を踏まえ諾・否の葉書を送る。\*総会 5月6日（祝）神戸市中央文化センター 講師 時里二郎会長

#### 【第5回常任理事会】

3月1日（土）神戸市中央区文化センター

出席者 11名 欠席者 1名 \*新入会員 4名 \*会計報告 \*「ひょうご詩の講座」 2月8日 講師 荒川稔 受講者 5名・「宝塚詩の会」 2月2日竹中郁について 参加者 12名

\*日本現代詩人会セミナー 2025 in 神戸 参加申し込み セミナール 146名 内会員 77名 懇親会 77名

\*「ひょうご現代詩集2024」遊文舎から発送済。「アソロジー参加者の集い」の実施決定

\*ポエム&アートコレクション ホームページに展示作品の写真を掲載することにした。チラシ送付先 会員、図書館、文学館、など。

\*時期役員の許諾状況について 諾 安西佐有理、岩井八重美、江口節、大西隆志、神尾和寿、神田さよ、北野和

博、高木敏克、高谷和幸、田伏裕子、玉井洋子、玉川侑香、野口幸雄、福田知子、福永祥子、牧田榮子、丸田礼子、山下輝代 以上 18 名

\* 来年度の事業 今年度の事業を検討し、来年度の事業について話し合いをした。\* 会報 \* 来年度の詩のフェスタの講師を検討

### 【2025年度第1回理事会】

4月12日(土) 神戸市中央区文化センター

出席者(役員承諾を得ている新役員含む) 20名 欠席者2名 \* 入会予定者 3名

\* 会計及び2024年度会計監査報告 3月会計報告、

2024年度会計決算報告、2024年度会計決算監査報告

\* 日本現代詩人会ゼミナール2025 in 神戸 本部より 郷原宏会長、塚本敏雄理事長、青木由弥子、杉本真織子、広瀬大志、松尾真由美、渡辺めぐみ各理事の参加

会計報告 参加者数 128名(講師蜂飼氏含む)、懇親会67名、2次会24名

\* ポエム&アートコレクション 3月27日より4月1日 神戸文学館 作品参加者 18名 来場者 124名 講演会(神尾和寿会員) 参加者40名・今後この事業を継続するか討議。多数決により、来年度より一旦中止することとした。

\* 総会 5月6日センタープラザ西館17号室 総会議案について検討。当日の役割と次第について検討。懇親会費3500円

\* 新理事の役割 理事会案として総会に提出

\* 詩のフェスタひょうご2025 10月5日(日) 13時 ラッセホール

\* アンソロジーの集い6月15日(日) 13時 神戸市中央区文化センター 2室に分け行う。

■他団体情報等 (2024・11〜2025・5)

日本詩人クラブ広報109号

岡山県詩人協会だより No. 43

福岡県詩人会 No. 190号・191号

青森県詩人連盟。会報534号

関西詩人協会会報第117号  
日本現代詩歌文学館 館報第103号  
高知県の会通信 31号

秋田県現代詩人協会会報第71号

岐阜県詩人会会報第22号

中日詩人会会報 No. 212

福島県現代詩人会会報第136号

栃木県現代詩人会会報第81号

山形県詩人会会報第40号

群馬県詩人クラブ会報 No. 330

茨城県詩人会会報 No. 39

島根県詩人連合会会報 No. 93

千葉県詩人クラブ会報 No. 268、No. 269

宮城県詩人会会報第36号

近江詩人会詩人通信4月

宮崎県詩の会会報復刊55号

長野県詩人協会会報 No. 158、No. 159

埼玉県詩人会会報第107号

千葉県詩集第57集

中日詩人集 64

栃木県現代詩年鑑2024年版

群馬県年刊詩集2024 No. 47

青森県詩集2024

埼玉詩集第19集

宮城の現代詩2024

鹿児島県詩集第28集2024年版

香川県詩集第27集

関西詩人協会設立30周年記念誌

岐阜県詩人集第12集2025

岡山県詩集2025

秋田県現代詩年鑑2025

■会員の詩集等・詩誌

〈詩集等〉

とし総子 『あなたの肌を描く』24年10月濤標  
竹之内稔 『さよなら 家康』24年11月私家版

以倉紘平 『以倉紘平全詩集』24年12月 編集工房ノア  
玉川侑香 『音が するのだった』25年3月詩人会議出版  
内田正美 『不安定な数式』25年4月濤標

### 〈詩誌〉

木想15 (高橋富美子)

現代詩神戸286・287 (永井ますみ)

ア・テンポ66 (丸田礼子)

プラタナス73 (玉川侑香)

多島海46・47 (江口節)

風の音28・29 (野口幸雄)

別嬢118・119 (高橋夏男)

Mester 64 (佐伯圭子)

日曜日の旅人5 (神田さよ)

鶴鶴23 (江口節)

EDGING 58・59・60 (寺田操)

Lingvo oktombro VOL. 24〜30 (高谷和幸)

### ■入退会

入会 しもやまゆりこ 高橋須美子・竹内よし栄・谷口ちぐさ・田邊史朗一色真理・為平濤

退会 相野優子・高橋夏男・吉田定一

### ■会員の活動

「憩いと出合いのスペース」

文 玉川侑香

「いちばぎやらしい侑香」を始めたのは阪神淡路大震災がきっかけである。家が壊れ、神戸を去って行く人たちがあつたをたたない。当時、「平野市場」の中でふとん屋をしていたのだが、何とか店を再開できたその店先では出会った人同士の立ち話があつたなかつた。

「やあ! 生きとったん!」という出合いのことばから始まって、一方がいまままでの自分の半生を滔々と語り、次は相方が同じように語る。冷たい風の吹く中、身じろぎもしないで30分、一時間と語り合うのだ。私は

聞くともなしにそのひとたちの人生模様を否応なしに聞くことになったのだ。

その時にふと思ったのだ。せめて座って、できれば熱いお茶でも飲みながら思いの丈を話す場所があればいいのに、と。

(そうだ、店の二階をそんなスペースにしよう。そうすれば神戸を出て行った人たちが帰って来た時にゆっくりできる場所がある。そして壁面をギャラリーにすれば気軽な展覧会ができるではないか)

思い立ったが吉日。知人の大工さんをお願いして倉庫にして二階の改築を始めた。

しかし、そもそも市場の中で「アート・ギャラリー」と言ったところで、周囲の反応は「？」だった。

「ぎやらりい何よ？ 何、売るん？」「ふーん、絵、飾って儲かるん？」などという反応に晒されながらも「いちばぎやらりい侑香」と名づけたギャラリーはオープン当日を迎えた。オープンングはごく近所の人形作家ながれ恵子さんの作品展「セピアドール展」で始まった。これは近所の市場に来るお客さんの作品展とあって、「へえー見せて見せて」と八百屋さんも魚屋さんもやってきた。ギャラリーで、こんなことするん」とやっとな得してもらったのであった。

以来、二階に上がるギャラリーの上がり口にはよそ行きのおしゃれな靴ではなく、長靴やつつかけなどが並ぶご近所さんの集まり場所になった。

展覧会も絵画展、写真展、陶芸展などと続き、展覧会をする作家さんとご近所さんとも仲良くなり「儲からへん」ぎやらりいは続いていったのである。

絵画展、写真展、書展、陶芸展、とそれなりのプロフェッショナルな作家さんの展覧会をそれなりにこなしてはきたが、転機が訪れた。ギャラリーの、というのではなく、この主体である平野市場存続の問題が持ち上がった。震災のダメージと大型店舗の進出は、このように小さな小売店の存在など霞のようになっていったのである。「ふとん屋」というわが営業そのものも、もはや風前の灯火であった。

そして、市場としてついに決意。とある食品スーパーに売却することとなった。布団屋はやめてもギャラリーをやめるわけにはいかなかった。新しい店はギャラリー一本でいく。そう決意して店舗を探し始めてみると、以前、カラオケ喫茶だったという店舗を紹介された。いかにも「昭和」の雰囲気そのままの内装がとても気に入った。黒っぽい花柄の壁紙に妖しげなランプ。作り付けの黒いソファにすすけた天井。

知人に見せると「ギャラリーにするんやったら全部白の壁にやりかえな」と言われたが、いや、このまま使うのも「歴史」でしよう、と言って改装はやめた。

この新しい店舗は元の市場から50mも離れていない場所、おまけにバス通りに面しているから地の利はいい。オープンは2011年4月であった

現代アートでは名高い堀尾貞治さんのパフォーマンスで始まった。オープンングに記帳してくださった方々は百人を越えたので驚いた。新しい門出に際しての信条はやはり「いこいのスペース」——人々が往きかい文化の交わる峠の茶屋のような存在になりたいと思った。どこからかやってきた人同士がひとたちとお茶を飲みながら話を交わし、またそれぞれに自分の目的に向かって出発していく。そのためにも休んでいく場所は楽しいに越したことはない。

それから今年で5年目。相変わらず「峠の茶屋」をたずねて来る人たちとの出会いを楽しんでいる。

### ■新入会員の紹介

#### 一色真理(いっしきまこと)

1946年名古屋市長。早稲田大学第一文学部ロシア文学専修卒業。詩集は10冊。『純粹病』で第30回H氏賞、詩集『エス』で第45回日本詩人クラブ賞、詩人秋谷豊への研究等の業績で第7回秋谷豊賞受賞。最新詩集は『幻力』。ほかに自伝小説『歌を忘れたカナリヤは、うしろの山に捨てましょか』、夢のアンソロジー『夢の解放区』(共著)、『夢千一夜』(電子書籍)。『一色真理詩集/新・日本現代詩文庫』は韓国でも翻訳出版された。『ピアノの本』

及び「詩と思想」元編集長。詩集制作プロジェクト「モノクローム・プロジェクト」代表。1994年から12年間、インターネット上に開設された共同夢日記「夢の解放区」を主宰。現在もブログ「ころころ夢日記」で日々の夢を描き続ける。詩誌「ファントム」同人。日本現代詩人会会員。

### 宿題

#### 1 箱

勉強机の上に一枚の紙を拡げる

ていねいに定規で点線を引く

点線に沿って山折りや谷折りをする

組み立てて白い箱をつくる

#### 2 学校

白い箱を持って学校へ行く

みんなに羽交い絞めにされ、ぼくは箱を奪い取られる

箱はひしゃげて潰れ、どろどろになり、傷だらけになる

クラスで一番体の大きい男の子が勝ち誇ったように、箱

の蓋をこじ開ける

クラス中がしんとした

#### 3 男の子

翌日、一番体の大きい男の子が自分の箱を持って登校してきた

次の日は、二人の男の子が、さらに次の日は三人の男の子

が……

とうとう男の子全員が箱を持って、登校するようになった

女の子はしんとして、箱を見ていた

女の子

#### 4 女の子

教室は箱でいっぱいになった

それでも男の子は新しい箱を持って毎朝登校してくる

ある日、クラスで一番きれいな女の子が箱のひとつを持ち帰った

次の日は、二人の女の子が、さらに次の日は三人の女の子が……

### 5 先生

最後にたつたひとつ白い箱が残った

「誰の箱？」と先生がお尋ねになった

みんなはしんとして、互いの顔を見合うだけだ

先生は「答は宿題にします」と黒板に書くと、黙って教室を出ていかれた

### ■為平澤

為平 澤（ためひら みお）

日本現代詩人会会員。

第22回詩と思想新人賞受賞。

第23回白鳥省吾賞受賞。

詩集に「盲目」（第67回H氏賞候補詩集）

詩集「生きた亡者」（第31回詩人クラブ新人賞候補詩集）

など。詩誌「ファントム」主宰。

### はなむけ

姨捨山で母を背負って下る力が欲しかった。母は山の中で力尽きた。小さな祠のあたりで自分自身を埋めるシャベルを取り出し、防空壕と噂のある洞穴で、先祖代々の墓石を見つけ、独りひっそり土を掘り返す。父に寄添い亡父母の傍に近寄って、時々空を見つけては出て行った子供たちのことを雲と一緒に数えて指を遊ばせる。そこから母はますます解れて、崩れていった。

身体に土を浴び、陰に誑かされ、目前に故郷は音もなくひらかれていく。花嫁衣装はタンスの中でもずっと白いまま

まだと信じ、覚えた献立の味はいつまでもたつても同じだと言いつける度に、黒髪は薄く白髪にしまわれ、口にしたスープの味は、さびれた砂鉄の味を口に残した。一滴の水を唇に紅く含ませ歯には土を食む。その後誰もが、母の行方を話したがらない。

\* 井戸に飛び込んだお初さんはなあ、旦那が動けんようになって、村の衆にいろいろ言われたんやろ、あんなのせいやってゆうて。だあれも助けてはくれへんしな。年取ったもんが、年取ったもんの世話するの。よっぽど辛かったんやと思うで。なんせ年はいっても夫婦なんやし。みんな自分のせいやゆうて、ちょっと前からおかしなつたもん。でも井戸からお初さん、引き上げたとき、両手両足、縄でしばつたつたらしいのや。井戸に飛び込む人間が、そ

ないな所縛るんかなあ……。

いろいろと変な噂もあつたらしいが、どうも水の中やから暴れんよう、自分でそないして括ったんやろ、と役場の人らは言いよつた……。ホンマに嫌な時代になりよつたな。それでも、ほれ、見てみい。お初さんが植えた桔梗が今年も咲いて蕾をつけとるがな。あれは、指で押したらパチンと泣くのや。植えた人が死んでも花は何にも知らんと長生きするもんやな……。

\* 故郷を出れば女は足を踏み外す。踏み外した泥濘で足をそろえ、沈み埋もれて、再び故郷はたちあがる。埋もれた土地の外側で、女たちは報いを受けた。生活というものが黙って円滑に回るために、数多の女の人身御供が今日も必要だとテレビは喋る。

外は長雨。故郷に花嫁、墓に花。

花はまだかと女を呼べば日照り続きの山村に半年分の雨が降る。

### ■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送ってください。イベント時に展示します。

詩に関するイベント情報や会員の動静もお知らせください。

### ■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い活動を行っており読書会・文学紀行などお互いの親睦・交流をはかっています。詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を求めています。

入会申込先

（野口幸雄 電話090-79663-0090

### ■ホームページにあなたのエッセイを

協会のホームページ「会員寄稿エッセイ」コーナーでは、会員のエッセイを掲載しています。詩人との出会い、同人誌の思い出、研究している詩人の事、日常ふと心をよぎった事等々。積極的な寄稿をお待ちしています。

・会員ならどなたでも投稿できます。協会から直接寄稿をお願いすることもあります。

・エッセイまたは評論をお願いします。

・連載も可能です。投稿数が多い場合はあなた専用のページを用意します。

・読みやすい縦書き三段組み、縦スクロールで掲載します。

・既発表・未発表を問いません。

ただし原稿は電子データでお願いします。（手書きの場合はご相談ください）

ホームページ担当理事・北野和博

（sorahito.jp@yahoo.co.jp）まで、メール頂ければ、様式をお送りします。

### ■会計より

新しい年度になりました。本年度の会費の納入をよろしくお願ひします。なお、振込みの際は本名とペンネームの両方をお書きください。会費は四千円です。

振替口座 009200-9-111243

口座名 兵庫県現代詩協会 担当 玉川侑香

◎会報編集 《高谷和幸》 Tel.079-447-3652

◎印刷《遊文舎》〒532-0012 大阪市淀川区木川

東4-17-31 Tel.06-6304-9325